

ソ連の動向重要日誌

1月

- 1日 ▶イルトゥイシ—カラガンダ運河開通。
- 4日 ▶ソルジェニツィンにノーベル賞。
▶大木・シェレーピン会談。
▶アルマ・アタのカプチャガイ水力発電所43万4000kwに達す。
- 5日 ▶人権運動のリーダー、プロフスキー氏に12年の刑宣告。
▶アムダリア河を通じてアフガンと船で交易。
▶ユダヤ自治州、ピロビジャン製靴工場年産400万足。
- 6日 ▶3,000人のユダヤ人昨年12月にイスラエルへ移住。
▶ウランゲリの築港進む。
- 7日 ▶コスイギン首相、バングラデシュ政府に歴史的勝利を讃える祝電。
▶イルクーツクのシェレホフ・アルミ工場拡張中。
▶樺太の東西兩岸を結ぶ鉄道開通。
- 8日 ▶日米経済戦争は今後も続くともスタワ放送述べる。
▶マガタンのエグウェキノトに建築材料工場操業開始。
- 10日 ▶タス通信に省の権限授与。
- 11日 ▶河野参院議長訪ソ。
▶沿海海上船舶局、ナホトカに新設。今次5カ年計画で大型タンカー15隻配備の予定。
- 12日 ▶ソルジェニツィン氏、再び批判される。
▶『コンモソル・ブラウダ』紙、新しい中ソ国境侵犯事件報道。
▶テープレコーダー用モーター50万台輸出、サンヨー電機。
- 13日 ▶イシコフ漁業相、河野参院議長に抑留漁民の釈放を約束。
▶キルギスのオシ—ホログ間高山自動車道路寒さのため通行困難。
- 14日 ▶拘置の米議員ジェームズ・シュワーに退去令。
▶SALT 10回目の会議。
- 16日 ▶アチンスク精油工場建設開始。
- 17日 ▶ベーリング海で米沿岸警備隊、ソ連漁船2隻を拿捕。

▶71年のソ連鉄鋼生産1億2000万トンで世界1位となる。

18日 ▶河野参院議長・ポドゴルヌイ会談。

▶トルクメンのチャルジョウ・ポリエチレン工場操業開始。

19日 ▶コルイマにタングステン鉱床発見。

20日 ▶ウラン・ウデ線区、鉄道電化工事完了。

▶コムソモリスクでアムール河鉄橋工事中。

21日 ▶コムソモリスクのフェリー渡船航行終了。氷上鉄道の建設開始。

▶“SOS 周波”の発信やめる。ソ連当局が要請受入れ—ソ連郵政電気通信省は21日、郵政省に「2,091キロヘルツの電波は使わないことにした」と電報で通知してきた。これはソ連のウラジオストク方面から発信する電波の周波数が日本の漁船などが近海で使っている SOS 発信の周波数と同じ2,091キロヘルツであるため、昨年夏ごろから混信が起り、遭難漁船の救助に支障をきたしていたもの。

22日 ▶1971年国民経済実績発表さる—中央統計局は昨年度の国民経済実績を発表したが、これによると

●工業生産成長率 7.8% (目標6.9%)

消費材部門 7.9% (“ 7.4%)

生産材 “ 7.7% (“ 6.7%)

●労働生産性 6.3% (“ 5.9%)

●穀物生産 1億8100万トン (70年1億8600万トン)

工業生産の生長率は70年の8.3%より下まわっている。人口は1月1日付で2億4630万人。

▶アンジェロ・スウジェンスク=ノボシビルスク間高圧送電線完成、ブラウクの電力はじめて西シベリアへ。

23日 ▶グロムイコ外相来日。

24日 ▶日ソ外相定期協議はじまる。

25日 ▶ソ連政府、バングラデシュ承認。

▶『ブラウダ』紙、文学芸術の思想統制指示。

26日 ▶クラスノヤルスク水力発電所の発電量、建設費を回収。

▶アンジェロ・スウジェンスク=イルクーツク間にもう1本のパイプライン必要。

27日 ▶『コムニスト』誌1月号、科学アカデミー経済

研究所を批判、技術革新のおくれを指摘。

- ▶2日間にわたるワルシャワ条約機構首脳会議閉幕。
- ▶佐藤・グロムイコ会談。
- ▶大石環境庁長官・グロムイコ外相と渡り鳥保護で会談。
- ▶外務省で日ソ両国外相、日ソ文化交流に関する書簡交換。
- ▶田中通産相とグロムイコ外相会談。
- 28日 ▶グロムイコ外相帰国。
- ▶日朝議連訪朝団、モスクワ着。
- ▶グロムイコ外相、ホテル・ニューオータニで内外記者会見。
- ▶中ソ国境河川交渉、ブラゴベシチェンスクで開催中。
- ▶日ソ共同声明発表。
- 29日 ▶カラガング炭坑、日産900トン。
- 31日 ▶サダト・エジプト大統領訪ソ。

2月

- 1日 ▶SALT、第6次会談ウィーンで閉幕。
- ▶大蔵省、日ソ租税条約交渉を検討中。
- 3日 ▶新華社、グロムイコ訪日を日本反動派との結託と非難。
- ▶ソ連・エジプト首脳会談開始。
- ▶アフリカ安保理で中ソ代表、米英を非難。
- 4日 ▶日ソ新空路交渉打ち切り。
- ▶エニセイ河の船舶春の航行準備開始。
- ▶ソ連・エジプト共同声明発表。
- 5日 ▶中ソ国境で紛争再燃か？——ソ連筋が5日語ったところによると、紛争は1月27日夜、中国の新疆ウイグル自治区とソ連のカザフ共和国との国境で起こり、中国領から2,700人のウイグル人がソ連領に越境したという。また同筋によると、これらウイグル人は、国境近くの中国領の町塔城（ロシア語名はチュグ・チャク）の南を、ソ連領アラユリ湖に向かって流れ込む川に沿って越境したもので、中国の国境守備隊は、これを阻止しようと発砲したが、ソ連の中央アジア国境警備管区（司令官キゼエンツェフ中将）の部隊は、あえて押しとどめることをせず、ウイグル人たちをソ連領内に迎え入れたという。
- ▶ソ連からイスラエルへ大量のユダヤ人移民到着——テルアビブ空港に本年1月エル・アル航空（イスラエル国営航空）のジャンボ・ジェット機が350人の移民を乗せてソ連から到着した。1回の飛行でこれほどの移民がイスラエルへ入国したのは、この国の歴史で初めて。
- ソ連からのユダヤ人移住は、昨年12月、1カ月当たりの移住者数としては、それだけの最高である3,000人を

記録、同年中の移住者総数は1万3000人に達した。

国内に約300万人という、米国に次ぐユダヤ人をかかえたソ連が、1昨年暮れからの国内でのユダヤ人問題の再燃に頭を痛め、国外から批判の目を向けられることを恐れて、ユダヤ人移民制限を緩和したという見方が強い。

彼らは政治意識が高く、イスラエル与党労働党のとなえる社会主義ははねつけ、宗教政党や右翼的なガハール運動に魅力を感じており、73年に予定される選挙の行方にも微妙な影響を及ぼすかもしれない。

▶日ソ航空交渉、現協定の1年延長合意。

7日 ▶日ソ貿易交渉始まる。

▶日ソ経済委、「チューメニ構想に全力」の方針決定。

10日 ▶アムール州のスコポロジノにバムストロイプチ（バム鉄道建設局）設置さる。

11日 ▶モスクワ＝ダッカ間電話開通。

▶党中央委行政部長 G・S・バプロフ密使として米国を訪問工作中か？

13日 『プラウダ』紙、「キプロスの併合を狙う」とギリシャ非難。

▶極地用ダンプカー群、2,500kmの雪原を走破してミールスイへ到着。

14日 ▶FBI、国連ソ連人職員をスパイ容疑で逮捕。

16日 ▶アムールスタリ（製鋼所）30周年記念。

▶ソ連の軍事力着実に増強と英国防白書——英政府は16日、1972～73年度の国防白書を発表。この中でソ連の軍事力が依然世界的に着実に増強されており、ICBM（大陸間弾道弾）および中距離弾道弾の数が2,100基、戦闘機・爆撃機など1万1400機が実戦配備されていると推定される、と警告した。

19日 ▶タス通信、ニクソン訪中前の北京の警戒のきびしさを報道。

20日 ▶ソ連国防相、カイロ入り。

21日 ▶トムスク工業大学、はじめてオートメイション学部卒業生を出す。

▶第5回日ソ経済人合同会議、東京で開催。

▶ルナー-20号、月面軟着陸。

22日 ▶モスクワ・テレビ、ニクソン北京訪問の模様と北ベトナム爆撃の模様を同時放映。

▶日ソ経済合同会議、2日目、ヤクート炭田の開発を討議。

▶北鮮代表団、モスクワ訪問。

24日 ▶東京で開催中の第5回日ソ経済合同会議閉幕。

▶日ソ経済合同会議共同コミュニケ発表。

▶在仏ソ連大使館、60年の技師引揚げは中国の挑発が原因と強調。

ソ連、トルコに接近工作中。

25日 『赤い星』紙（国防省機関紙）、林彪は71年9月の政治局会議で失脚と報道。

ソ連・南ヤクート炭田の日米ソ共同開発に関し US スチールより打診あり。

26日 ソ月20号、月面より帰還。

レナ河船舶局改組——*Vodnyy Transport* 紙によれば、ロシア共和国河川船舶相の命令により、このほどレナとコルイマ・インジギルカの両船舶局を併せたレナ河統一船舶局が創設された。

29日 『北ベトナム』紙、『ニャンザン』紙、中ソ対立を報道。

ソ連特学アカデミー、月の土のサンプルを各国に引渡す。

『トルード』紙、米中共同声明に具体的成果なしと報道。

東欧各紙、ニクソン訪中を非難。

タス通信、米中共同声明を報道せず。

3 月

1日 ソウラジウォストークに国際コンテナ荷役用大型クレーン。

バングラデシュのラーマン首相訪ソ。

3日 ソマガダン州に新金銀鉱山発見。

5日 ソ連・バングラデシュ共同声明。

6日 ソ西独与党動揺、対ソ条約批准困難化。

7日 『新コミンテルン計画——西独の『フランクフルター・レントシヤウ』紙は7日、ソ連が再びコミンテルンもしくはコミンフォルムのような新しい組織をつくる計画を着々とすすめているというベオグラートからの報道を伝えた。

8日 ソウスチ・イリム水力発電所の建設すすむ。

10日 ソアンガラ河流域に埋蔵量2億トンの鉄鉱山発見。

15日 ソ日交渉終わる。

16日 ソパキスタンのブット大統領、訪ソ。

18日 ソザバイカルの採金船、操業開始。

ソ連・パキスタン共同声明。

20日 ソアム・ダリア河の航行、寒さのため2カ月おくれる。

22日 ソソ連側漁業委員サケ・マス・ニシンの大幅規制を提案。

アジア開銀に協力をソ連正式に表明。

24日 ソソルジェニツィン、ロシア正教大主教を非難。

ソ日ソ・文化協力計画に調印。

ソシェレーピン議長再選、全ソ労組大会閉幕。

ソマラッカ海峡、国際化をソ連移動大使主張。

ソエジプトに海軍基地借用申入れ。

31日 ソザバイカルへ向かう石油パイプラインの建設はじまる。

4 月

1日 ソ中ソ国境ソ連軍、44個師団に——世界で最も権威のある軍事戦略問題研究機関として知られる英国の国際戦略研究所は1日、年次報告「戦略調査1971年」を発表した。

内容の骨子次のとおり。

(1) 8,000キロにわたる中ソ国境地帯に配備されたソ連軍は前年より14個師団多い、44個師団に増強された。これは全ソ連地上軍の約4分の1にあたり、過去3年間に約3倍に増強されたことになる。

(2) これら国境配備のソ連軍は核兵器を装備しているといわれ、兵器、空軍支援力、機動性において中共をはるかに上回っている。

(3) 中共は印パ戦争で後退を余儀なくされ、インドを支持したソ連は同地域で威信を高めた。このソ連進出阻止で米中両国の利害が一致した事実はアジア内外に複雑な戦術的同盟関係ができあがる展望を開いている。

9日 ソソ連艦隊のイラク訪問発表。

ソコムソリスクのフェリーボート、暖冬のため1カ月早く動きはじめる。

10日 ソ米、ソなど47カ国、生物兵器禁止条約調印。

ソ社党・訪日ソ連代表団共同声明——社会党とソ連共産党は10日、訪日活動家代表団（団長・タバーエフ中央委員）と社会党代表団（団長・川崎国際局長）との間の共同コミュニケを東京とモスクワで同時に発表した。

11日 ソブレジネフ書記長、米農務長官バッツ氏と会談。

ソポドゴルヌイ議長、トルコ訪問。

ソ東シベリアの石油パイプライン建設開始——アンジェロ・スウジェンスク＝クラスノヤルスク＝イルクーツク間石油パイプライン建設はすでに最初の100kmを溶接した。

12日 ソ西独野党にソ連外相警告。

ソ日ソ、カニ交渉で合意。

15日 ソコルイマ河口の発電船活動中——コルイマ河の河口に近いゼリョーヌイ、ムイス港に発電船があり、これを中心として500kmの範囲に電力を供給できる。ビリビノの鉱山企業、同地の原子力発電所の建設、チュコトカの鉱山、コルイマ河口の港、魚類加工工場、トナカイ飼育場はここから電力を受けている。

16日 ソタス通信、米の北爆非難の声明。ソ連船の被害にふれず。

17日 ソソ連・トルコ武力不行使宣言。

18日 ▶ソ連政府、外国貿易銀行の東京支店開設を申入れ。

▶ソ連代表、軍縮委で日本の核停案拒否。

▶ソ連政府、国際捕鯨監視員協定に調印。

19日 ▶ニクソン訪ソ、先遣隊モスクワ入り。

20日 ▶ワニノ港の活況——ワニノ港は活況を呈し、次々と木材を積んだ列車がはいり、海洋船が入港している。

21日 ▶日ソ、サケマス交渉妥結。

23日 ▶ニクソン歓迎の準備、モスクワですすむ。

24日 ▶ソ連軍事代表、金日成首相と会談。

25日 ▶日ソ、コンプ交渉妥結。

26日 ▶ヤクーチャで TU=134型機のテスト実施。

▶オビ河航行開始。

27日 ▶ヤクート自治共和国創立50周年。

▶アムール船舶局の航行開始。

28日 ▶ソ連・エジプト首脳会談終了。

▶ソ連外務次官、ハノイへ。

▶カツシエフ書記、ハノイへ。

29日 ▶エジプト大統領帰国。

5月

1日 ▶赤の広場で恒例のパレード。

5日 ▶ソ連のジャンボ機公開——ソ連の労働組合中央評議会機関紙『トルード』とタス通信は5日、350人乗りのジャンボ・ジェット機（エアバス）「イリュージン86」の模型写真を初めて公開した。

9日 ▶ウラジボ＝チュコトカ航路開始——チュコトカ向けの貨物を積んだ本年最初の船「タイゴノス」号がウラジボ商港を出港した。砕氷船「レニングラード」号は船団の先頭を進んで、現在すでにアナドゥイル湾に近いところまでいっている。

11日 ▶中央アジアの船舶航行最盛期に入る。

14日 ▶アムール州の大豆作付——アムール州のコルホーズとソフホーズは今年は昨年より約3万ヘクタール多い62万ヘクタールの大豆を作付しなければならない。

▶リトワニアのカウナス市でカソリックの青年が信仰の自由を求めて焼身自殺。

15日 ▶北太平洋、沿海州沖でソ連が射撃演習。

▶外務省、ソ連の射撃演習、変更申入れ——ソ連が16日から沿海州周辺、20日から北洋A区域で極東艦隊の実弾射撃演習を予定しているという水路情報について、外務省は15日「すでに駐ソ日本大使館を通じてソ連政府に“わが国の漁業などに影響のないよう計画を変更されたい”旨、申し入れてある」ことを明らかにした。

▶ニクソン訪ソ、ソ連、受入れ——クレムリンは“さまざまな困難があるにもかかわらず”予定どおりニクソ

ン訪ソを受け入れることを決定した。“ニクソン訪ソ受け入れ決定”は、クレムリン内の論争でブレジネフ路線が勝ったことを意味する。一時はシェレスト＝シチュエルビッキー両党中央委政治局員のウクライナ派が、ブレジネフ書記長＝コスイギン首相にとって代わるのではないか、その陰でスースロフ、シェレーピン政治局員らが策動しているといったうわさも流れた。

16日 ▶オビ河とその支流の航行開始。

▶レナ河の航行はじまる。

▶トムスク州のパイプライン圧送テスト終了。

17日 ▶SALT 協定まとまる。

18日 ▶米ソ通商交渉はじまる。

▶ソ連監視員が同乗、捕鯨母船「第2図南丸」北洋へ出発。

▶ソ連・エジプト新武器協定。

▶リトワニア共和国カウナス市で暴動発生——14日に発生したカソリック青年ロマン・タランタの焼身自殺をきっかけに、「自由」を叫んで数千人がデモをおこない、数百人が逮捕された。

▶ハリコフで AN 10型旅客機墜落全員死亡。

19日 ▶党中央総会開く——ソ連党中央委員会総会が半年ぶりに開かれ、「国際情勢について」のブレジネフ書記長の報告を聞いたのち、同報告を承認し、党の平和政策と行動を支持する決議を満場一致で採択した。この討議にさいし、グレチコ国防相らが発言した。総会はまた党員証書換えに関するカピトノフ書記の報告を聞いたのち、この問題に関する決定を下した。このあと総会はポノマリョフ書記を政治局員候補に選出して閉会した。

▶海空事故防止で米ソ協定。

▶西独政府、ソ連、ポーランドとの武力不行使条約（東方条約）批准。

21日 ▶ソ連在住ユダヤ人302人がニクソン大統領にイスラエル移住支援を依頼。

▶マガダン州の5カ年計画に20億ルーブル。

▶『プラウダ』、米ソ関係の重要性強調。

22日 ▶米大統領、モスクワ入り——ソ連公式訪問のため米大統領ニクソン夫妻と随員一行は22日午後3時55分、ザルツブルグからモスクワのウヌコボ第2空港に到着した。空港にはポドゴルヌイ、コスイギン2首脳はじめ党、政府の要人多数が出迎えた。ブレジネフ書記長は空港には姿を見せなかった。

▶ニクソン・ブレジネフ会談、午後6時から開始。

▶午後8時から最高会議と閣僚会議共同主催の晩餐会、両国首脳挨拶を交わす。

▶秘密警察、ユダヤ人4名を拘禁。

23日 ▶米ソ首脳、公式会談はじまる——23日午前11時

からクレムリン内でニクソン大統領、ロジャーズ國務長官、キッシンジャー補佐官と、ブレジネフ、ポドゴルヌイ、コスイギン3首脳を含むソ連側とが公式会談に入った。

24日 ▶ソ連東部の北氷洋航海開始——ワニノ港からチュコトカの各岸に向かい半島の建設用貨物を積んだディーゼル船《レニヤ・ゴリコフ》号が出港した。これによってソ連邦東部の北方航海がはじまった。

▶米ソ宇宙協定調印。

25日 ▶ウクライナ第1書記、シェレスト氏解任。

▶ニクソン夫妻のバレエ観劇中、一女性の観客が叫ぶ——ニクソン米大統領は25日、午後7時（日本時間26日午前1時から、忙しい首脳会談の合い間をぬって、パット夫人を同伴、クラシックバレエの殿堂ポリショイ劇場で若手カップルの踊る“白鳥の湖”を観賞したが、観客の一女性がベトナム問題で抗議の叫び声をあげるというハプニングがあった。

▶ソ連船の中国港利用はないと米國務省筋。

▶ビリビノ採鉱富化コンビナート春季稼業開始——『プラウダ』によれば、マガダンからの通信として、チュコトカの採金シーズンがはじまり、ビリビノ採鉱富化コンビナートがまっさきに作業に着手した。そして43号たて坑では同地ではじめての大きさの重量836gの自然金塊を掘りだした。

27日 ▶米大統領レニングラード着。

▶エニセイ川水中翼船の旅客輸送——エニセイ川航運局の水中翼船団は最長距離のクラスノヤルスク＝エニセイスク間旅客運航を開始した。今年の航行期間に100万人以上の旅客を運ぶことを予定している。

29日 ▶米ソ共同声明発表。

6月

2日 ▶中ソ国境交渉の新首席代表に余湛氏。

▶中国、ソ連物資の通過を保証とシアヌーク殿下語る。

▶沿海州で射撃訓練、ソ連が再通告、外務省は中止要請。

▶米英仏ソ、ベルリン協定調印。

4日 ▶ブラック人工海にまだ氷——ブラック人工海にはまだ氷が残っているが、河川航行従業員はすでに貨物輸送に着手した。

5日 ▶チトー大統領、5年ぶりに訪ソ。

9日 ▶ウクライナ共和国首相に A. P. リヤシコ任命——シチェルビッキー首相がシェレストの後任としてウクライナ第一書記に転出したので、その後任として A. P. リヤシコが任命された。

10日 ▶アムール＝日本間国際貨物船航路——アムール

河川船舶局はアムール＝日本間の国際貨物船航路を開設した。海上貨物船《バルチースキー》号、《バルチースキー＝72》号、《モルスコイ＝1》号などの貨物船は日本の新潟、青森、柏崎、伏木、七尾および舞鶴へ最初の1万1200m³の用材を輸出した。

14日 ▶極東海運のコンテナ輸送への切りかえ——極東海上船舶局で多くの船舶のコンテナ輸送への改装が完了した。極東の諸港へコンテナ専門埠頭用の移動クレーン、牽引自動車その他各種機械が送られた。

17日 ▶ウスチ・イリム水力発電所用タービン作動輪の水上輸送——ウスチ・イリム水力発電所用の発電タービンの作動輪はレニングラードの鉄鋼所でつくられたが、その1コの重量は約160トンある。これは鉄道で輸送することができないので、ネバ川から白海、ワレンツォフ海、カラ海を通り、エニセイ川からアンガラ川をさかのぼり水上輸送でウスチ・イリムスクに送られる。

▶アムール川、レナ川下流の航行はじまる。

21日 ▶ソ連の反対制歴史家ヤキル氏逮捕さる。

22日 ▶“ソ連権利章典”提案、水爆の父サハロフ博士——ソ連水爆の父として有名な物理学者のアンドレイ・サハロフ博士は22日、“ソ連の権利章典”ともいうべき社会改革案を提案、ソ連の経済、外交政策を大幅に再編成するよう呼びかけた。

改革案に盛り込まれたおもな具体策は次の通り。

- (1) あらゆる政治犯の恩赦。
- (2) 秘密裁判の中止と“知る権利を侵害して”行なわれた全判決の再検討。
- (3) 政治的異端者を精神病院に収容する根拠となっている現行諸規定の明確化と、新たな立法。
- (4) 新しい新聞法を起草し、“知る権利”に基づいて国民の討議にゆだねること。
- (5) 外国放送の電波妨害中止。
- (6) 外国文献の自由な入手。
- (7) 外国旅行の自由化。
- (8) 死刑廃止の再検討。
- (9) アル中の絶滅運動の強化。

サハロフ博士はこのほか人種の侵犯に全く無関心な政府、党、文化界のエリートの公然、非公然の特権を非難するとともに、単一候補者による選挙の中止、政府、党の指導者を国民的な基盤で選出する規定、不適当と認められた場合、あらゆるレベルの当局者をリコールする——などを提案している。

▶香港＝ナホトカ＝西欧コンテナ輸送はじまる——ナホトカから香港へ西独からの40呎コンテナを積んだディーゼル船《カワレロボ》号が入港した。このコンテナはヨーロッパからソ連領を経て極東の海へと長い道

を運ばれた。コンテナがソ連領にはいり、シベリア幹線を半カ月で極東のナホトカ港に着き、1日おきに船に積まれて香港へ送られる。

23日 ▶ウスチ・イリム鉄道完成。

▶ナホトカ造船所で旅客船建造中。

26日 ▶カストロ首相、モスクワ入り。

29日 ▶ウスチ・イリム鉄道臨時運転。

30日 ▶西独・チェコ復交渉。

▶ソ連、プログノーズ2号打ち上げ。

7月

1日 ▶極東の電力系——ハバロフスク発電所は南部極東につくられる単一電力系の中心である。これに建設中のゼーヤ水力発電所、ルウチェゴルスクのプリモルスカヤ国営地区火力発電所も加わる。送電線はすでにアムール州とハバロフスク地方の電力系を結合し、いま建設されている22万Vの高圧送電線はハバロフスクとプリモルスカヤ発電所をつなぐことになる。

7日 ▶リトアニア不穏?——7日付け英『デイリー・テレグラフ』紙は、バルト海に面するソ連・リトアニア共和国の情勢が不穏で、最近ソ連軍特別治安部隊と警察の増援部隊がリトアニアに派遣されたと報じた。リトアニアで5月14日から6月3日までに、学生、労働者など3人がソ連政府に抗議して焼身自殺をとげたことは、西独にも伝えられている。同紙によると、5月半ばにリトアニア第2の都市カウナスで2日間にわたる反ソ暴動が起き、数百人の逮捕者を出したほか、6月半ばにも首都ビリニュスでスポーツの集会在荒れて反ソデモになり、150人の青年が逮捕されたといわれる。

▶ベベクへ第一船入港——ベベクの全市民は今年最初の船の入港を大歓迎した。氷原の航海は非常に困難で、強力な砕氷船が航路を切り開いた。

▶沿アムール諸地区の水害——沿アムールのブウレヤ、セリヨムジャ川などが氾濫し、ウルフネブウレヤ(ブウレヤ上流)、セリヨムジャ、マザノボなど各地区の部落が洪水に見舞われ、橋梁、通信線および送電線が被害をうけた。

8日 ▶米、ソ連へ穀物大量輸出——ニクソン米大統領は8日、サンクレメンテの“西のホワイトハウス”で、ソ連と今後3年間に7億5000万ドルの小麦、飼料用穀物を輸出する協定に合意したと発表した。

▶ノボシビルスクへの高圧送電線——500kvの高圧送電線の稼動によって、ノボシビルスクと同州内の工業は、はじめてクラスノヤルスクとブラック水力発電所から電力を受けることになった。

10日 ▶第26回コメコン総会始まる。

▶ソ連に最恵国待遇、米商務長官が表明。

11日 ▶キューバ、コメコン加入。

12日 ▶ニクソン大統領、ソ連大使と会談。

13日 ▶マクガバン指名をタス通信歓迎——タス通信はマクガバン米上院議員の民主党大統領候補選出を“反戦派の勝利”として歓迎した。

▶チューメーニ油1億5000万トン採取——チューメーニでは操業開始以来1億5000万トンの原油産出を記念した。そのうちの5000万トンは最初の6年間に、次の5000万トンは1.5年間に最後の5000万トンは11カ月で採取した。

▶ゼーヤ水力発電所建設遅れる——ゼーヤ水力発電所建設は鉄骨材と若干の水力機械設備の到着遅れによって、常に遅れている。

16日 ▶『プラウダ』、周総理を名ざして非難。

19日 ▶ソ連軍事顧問団のエジプト退去、タスが発表。

▶イラク外相が訪ソ。

▶ソ連要員、エジプト退去開始。

20日 ▶ソ連・イラク友好条約発効、批准書交換。

▶ソ連、西独元外相の訪中非難。

22日 ▶ソ連アゾフ海岸で地下核実験か。

▶エジプト撤退のソ連顧問は1万人。

23日 ▶ソ連の工業生産達成率、史上最低の恐れ——23日のソ連各紙は72年前半のソ連経済の実績についてのソ連中央統計局発表を一斉に掲載した。それによると、ことし上半期の工業生産成長率は昨年同期比6.8%で、これは平時の最低記録である69年前半の実績より悪い。

▶ソ連のエジプト援助総額70億ドル。

25日 ▶中国、対ソ戦略を変更か——25日付の『ニューヨーク・タイムズ』は、米政府当局者の見解として、中国が戦術核兵器の生産に力を入れ、中ソ国境に第1線部隊を配置しているなど、対ソ戦略を展開しつつあるとの見方を伝えている。

27日 ▶ソ連航空機もエジプト撤退。

29日 ▶AMB 制限条約批准手続き。

30日 ▶ソ連人のエジプト撤退、ほぼ完了。

8月

1日 ▶米ソ貿易合同委閉幕。

9日 ▶収穫大減少で緊急会議——9日付のソ連共産党機関紙『プラウダ』によると、8日、モスクワのソ連共産党中央委員会本部で農業問題に関する重要会議が開かれ、席上ブレジネフ書記長がソ連農業の当面する諸問題解決のための課題について演説した。

23日 ▶ソ連爆撃機、上海近くへ訓練飛行——23日午前9時40分ごろ、日本海を4機編隊で南下しているのを航

空自衛隊のレーダーがとらえ、小松基地（石川県）と築城基地（福岡県）のF86F戦闘機計6機がつつぎに緊急発進し監視に当たった。4機（TV16）のうち2機は途中で引き返したが、2機は奄岐島の西約12kmの地点を通過して対馬海峡を抜け、上海方向に向かった。日本の戦闘機は五島列島沖まで見張ったのち帰投した。このソ連爆撃機は同11時40分ごろ日本のレーダーから1度消えたが、約30分後に中国方面から帰ってくるのを再び日本のレーダーがつかみ、築城基地のF86F2機と新田原基地（宮崎県）のF104J2機が発進、監視を続けた。

ソ連爆撃機は高度6,000mで飛んでいたが対馬海峡を抜けるときは600mの低高度まで降り、誤って日本の領空にはいらぬよう気を使っていた様子だった、という。

24日 ▶シベリアの収穫不良。

25日 ▶ブレジネフ、カザフスタンで農業緊急会議。

26日 ▶極東に160の航空路。

27日 ▶アルタイ各地に農業機械急送。

31日 ▶シベリアの困難な収穫状況——シベリアの1,600ヘクタール余の穀物地帯で大規模な収穫作業が繰りひろげられている。しかし寒い夏のためにコンバインの出動が10日ばかり遅れた。いたるところ麦は倒れ、雨が取り入れを妨げている。

▶今年の北氷洋向け最終タンカー——8月31日北氷洋岸のペベクに向かって沿海地方船舶局所属のタンカー《インターナショナル》号が本航行期間最後のソビエト北極地区用石油製品を積んで出発した。

▶ノボシビルスク州の党・経済活動家の集会——8月31日ノボシビルスク州の党・経済活動家の集会があり、2,000人以上の党とソビエトの職員、経済組織と企業の指導者、科学文化の活動家が参加した。ブレジネフ書記長が収穫奨励の演説を行ない、ノボシビルスク州党第一書記F.S.ゴリャチェフが報告した。

9月

1日 ▶ザバイカルの困難な収穫状況——今年ザバイカルの取入れは非常に困難であった。いたるところで小麦の伸びが低かった。そのために刈取りにはコンバインに特種の装置をとりつけなければならなかった。また小麦は同一の場所で成熟がまちまちであった。そのためにいろいろな刈取りかたをしなければならなかった。

▶ブレジネフ書記長オムスクへ——9月1日ブレジネフ書記長は収穫奨励のためオムスク市に到着した。

3日 ▶ヤクーツク市ヘマンモスの遺体——ヤクーツク市へこのほどマンモスの遺体を送られてきた。これはソ連邦科学アカデミー・シベリア支部ヤクーツク地質研究

所の調査隊の手で発見されたもので、身長は3m、場所は北緯71度、インジギルカ下流、シャンドリン川の岸、永久凍土中から発見されたものである。

5日 ▶ブレジネフ書記長タシケントへ——9月5日タシケント市で綿花作付の各共和国の党・経済活動家の会議が開かれた。会議にはブレジネフ書記長および各共和国の書記が出席し、綿花取入れ促進につき討議した。ブレジネフはタシケントからモスクワに帰った。

7日 ▶訪ソ議員団（団長福田篤泰氏）モスクワ着。

8日 ▶ザバイカル鉄道電化工事進行中——ザバイカル鉄道の電化作業が進み、現在チタとカルイムスカヤの間の支柱建設が急速度で行なわれている。

10日 ▶トルクメン共和国の綿花取入れ——トルクメンの農民は国家に対し93万トン以上の綿花を供出するという新しい目標を与えられた。

▶ザバイカルの困難な収穫状況——ザバイカルの農作物の収穫は非常に困難であった。作業は極度に短い期間に終わらなければならなかった。沢山の夜間作業用コンバインは電灯をつけていないために、作業時間は非常に短かった。

12日 ▶キッシンジャー、ソ連首脳と第2回会談。

13日 ▶ヤクート石炭生産——ヤクートの炭鉱は今年はじめから予定よりも1週間早く100万トンの石炭を採掘した。

15日 ▶バム＝トゥインダ鉄道建設——バム（アムール州、ザバイカル鉄道上ボリショイ・ネベルの西）＝トゥインダ鉄道建設で最初の数百メートルのレールが敷かれた。

19日 ▶最高会議（第8次第4会期）開幕——この会議の前に党中央委総会が開かれなかったことは注目に値する。

▶ソ連地中海艦隊、レバノン沖へ移動

20日 ▶最高会議閉幕——2日間にわたる会議で自然保護と資源利用の改善に関する措置を政府に委任する件を採択、閉幕した。また、ソ連最高裁長官にレフ・スミルノフを選出した。

▶乗取り犯人に重刑——昨年10月、小型機を乗取ってトルコへ逃げ送還された2人の学生に対しウクライナ最高裁は矯正労働13年と10年の刑を宣告した。

24日 ▶沿海地方の米穀の取入れ——沿海地方で米の収穫がはじまった。沿海地方全体では2万1000ヘクタールの稲を刈らなければならない。

25日 ▶田中首相の北京到着、論評抜きで小さく報道。

26日 ▶駐エジプト・ソ連大使、カイロへ帰任。

▶日本の常任国連理事国案にソ連反対。

27日 ▶ソ連船舶相訪米。

▶ワニノからの北方航路終了——ペベクに向かいディーゼル電気船《オレネク》号が自動車、組立家屋部品、工業商品を積んで出港した。これで本年の北方向け航路は終わる。

28日 ▶ヤクーツク河川港の重要性——ヤクーツクの河川港はレナ河では最大の機械化された港で、短い航行期に200万トン近くの貨物を取扱っている。

29日 ▶西シベリア製鉄所にコンピューター——西シベリア冶金工場で電子計算機が仕事を始めた。これによってソ連最大の製鉄所でオートメ化システムが動き出したわけである。1975年までにはこの製鉄所の主なる工場が単一の情報コンピューターで制御される予定。

▶ラザク・マレーシア首相、公式訪ソ。

10月

3日 ▶『ピロビジャン・ユダヤ』紙の抗議——極東のユダヤ自治州の新聞『ピロビジャン・シテルン』、『ピロビジャンスカヤ・スベズダ』紙はシオニスト・グループの新しい反ソ連邦の中傷やデマの運動に対抗する州勤労者グループの書翰を発表した。書翰はシオニストがひきおこしている反ソ、反共的扇動に対し断固たる決意を表明しているモスクワ代表の声明を熱烈に支持している。

▶SALT 条約米ソ批准書交換、発効。

4日 ▶パプロダル州の収穫終わる——パプロダル付近のイルトゥイシ流域の農民は国家に100万トンの穀物を供出した。

6日 ▶沿海地方の米収穫——沿海地方は3,000トン以上の米を国家に供出した。今年は4万トン以上の米を供出することになっている。

7日 ▶タシケント＝アラル海間幹線自動車道路——ウズベキスタン最大のタシケント＝アラル海間幹線自動車道路の建設が進んでアラル海岸に達した。

8日 ▶ドゥジカ港多忙——今航行期間にドゥジカ港は数十万トンの貨物を取扱った。結氷期が近づくまでにノリリスクの鉱山・冶金従業員やタイムイル民族管区住民のため冬期間に必要な貨物を送る努力がなされている。

▶ソ連機、モスクワ近くで墜落、史上最大の176名死亡。

13日 ▶ゼーヤ河の閉塞作業完了。

14日 ▶カザフ共和国、10億ブード以上の穀類供出。

▶米ソ海運協定成立。

▶エニセイ河航行シーズン終了。

▶キルギスのビート収穫100万トン。

18日 ▶米ソ貿易協定成立互に最恵国待遇。

19日 ▶オムスク州の穀物収穫150万トン。

20日 ▶大平外相、モスクワ入り。

21日 ▶アルタイ地方、508万トンの穀類供出。

▶138家族のユダヤ人に無税出国許可。

▶朝日新聞モスクワ支局長、退去令——木村明生特派員は48時間以内に国外に退去するようソ連政府から要求されたので、朝日本社は人事異動の形で同特派員を21日、ソ連から出国させた。木村特派員は特に反ソ的な記事は書いておらず、むしろ、ソ連に好意的であった点から、今回の措置は明らかに、朝日新聞の余りに北京寄りすぎる姿勢に対する警告とうけとられている。

22日 ▶エジプトにミグ23供与か？

26日 ▶極東解放50周年——極東各市はソ連邦共産党中央委員会の指令により、極東を外国干渉軍と白衛軍から完全に解放した日の50周年記念の祝賀行事を行なった。チタ市とブラゴベンシチェンスク市に対し、十月革命勲章が授与された。

▶ソ連・イタリア海運条約調印。

▶エジプト国防相解任、対ソ正常化のためか？

28日 ▶チュメニ油田調査計画遂行——スウルグット石油調査隊は調査の年度計画を遂行し、井戸を6万以上掘り、3カ所の新しい油田を発見した。

▶ソ連軍事顧問団員、続々エジプトへ復帰中。

11月

3日 ▶極東船舶局のコンテナ専用船増加——極東船舶局へ新たにコンテナ専用船《ピオネル・ウラジボストカ》号が加わった。この船は時速16ノットまで、国際型のコンテナ218を積むことができる。年末までにさらに同型の《ピオネル・ナホトキ》号と《ピオネル・プリモリア》号の2隻が加わる。同時に時速17ノットで、300のコンテナを積むコンテナ専用船《アレクサンドル・ファデーエフ》号と《アレクサンドル・トワルドフスキー》号が極東船舶局のため建造されている。

▶ソ連、中ソ国境で強硬措置をとる方針決定か？ 北京外交筋言明。

4日 ▶極東船舶局のタンカー船団——サハリンの北部のモスカリボ港から日本に向かいタンカー《アイハル》号が出航し、今年度のこの航路は終了した。この航路ははじめてのサービスで日本に数十万トンの原油を送った。現在極東船舶局のタンカーは42隻総積載量35万トンである。なおこの5カ年計画中にブルガリアで建造される8隻の同型のタンカーが加わることになっている。

▶マツケビッチ農相、記者会見で不作をみとめる。

▶アムール川の航行終わる——11月4日、昨年より10日早く、アムール川の今年の航行は終了した。

5日 ▶カラガンダ炭坑の採炭成績——カラガンダ炭坑では今年をはじめから計画より100万トン多く採炭した。ここでは坑夫1人の採炭量は月平均78.5トンである。

6日 ▶革命記念前夜祭でマズロス演説、農業問題対策説明。

▶中国、ソ連へ革命記念祝電。

7日 ▶革命55周年パレード、赤の広場で挙る。

8日 ▶ソ連側、ヤクート天然ガス開発に25～30億ドルのバンク・ローン要請。

▶ハバロフスク地方の大豆取入れ状況——ハバロフスク地方の農民は6,000ヘクター以上の農地の大豆を11月7日と8日の2日間で取入れを済ませた。

▶《アムールスタリ》の粗鋼生産——《アムールスタリ》(アムール製鋼)工場はこの11月8日、今年のはじめから計算して2万2000トンの粗鋼を生産した。これは計画課題より2,000トン多かった。

9日 ▶アムダリヤ川中流各地の棉花収穫——チャルジョウ州の農民は計画よりも非常に多い約23万トンの棉実を国家に提出した。

▶アルタイの穀物収穫好調——アルタイ地方の農場はすでに524万4000トンの穀物を供出した。

10日 ▶金200トン売却か——英紙『サンデー・テレグラフ』はこの数カ月の間に25トンの金塊がソ連からロンドンに空輸され、チューリッヒへは月に10～15トン、米国へは月に8トンの割で積み出されており、今年中に約200トンの金塊(1億6660万ポンド相当)が積み出されたと報じた。

11日 ▶ナザロボ＝アバラコボ高圧送電線開通——本日ナザロボ＝アバラコボ間送電線に220kvの高圧電流が通った。この送電線はナザロボ国営地区火力発電所の安価なエネルギーをマクラコボ・エニセイスクの林業地区の企業に供給する。

▶ヤクート自治共和国の冬季道開設——ヤクート自治共和国では凍結した湿地、河川、針葉樹林、山地を通過する冬季交通がはじまった。

▶サハリンのフェリーポート建設遅れる——10月末にサハリン船舶局の従業員の1団がフェリーポートを建造中のバルチックに到着した。間もなく《フェリーサハリン-I》号が極東に向かい出港する。しかしワニノとホルムスク両港の工事が遅れているので、フェリーの就航は1973年の前半に見送られた。

▶反体制人物の電話制限。

13日 ▶『イズベスチャ』紙、「ネルチンスク条約は公正」と力説。

15日 ▶ヌウレク水力発電所発電開始——タジク共和国のワフシ川に建設中であったヌウレク水力発電所の第1

発電機(出力30万kw)は11月15日に発電を開始した。

17日 ▶エニセイ川北氷洋航路終わる——エニセイ川の北氷洋航行は終了した。イガルカ港から最後の海上木材輸送船《ベロゼルススクレス》号が出港した。本航行シーズン中、イガルカ港から119万5000m³の用材が発送された。

▶日ソ合同会議閉幕、サハリン、ヤクートの開発案煮つめる。

▶『コムニスト』誌、『紅旗』の大国主義を批判。

20日 ▶モスクワで日ソ民間海運会議。

21日 ▶米ソ、第2次戦略兵器制限交渉SALT II はじまる。

24日 ▶キルギズの棉花18万5000トン。

▶ウラジボストークにはじめてのセルフサービス・デパート——このほどウラジボストークではじめての大きなセルフサービス・デパートが開かれた。販売ホールの広さは1,300m²、付属室は2,700m²以上あり、冷凍室、包装器械、迅速レジ装置、電子ハカリ、運搬車などあり、毎日1万5000人までの客をサービスできる。

25日 ▶ヤクートの塩辛い川——ヤクート自治共和国のオレクミンスク市付近でレナ川に流れこむ支流をソリヤンスキー(塩辛い)川と呼んでいるが、この川の水は1lのなかに21gの塩分を含んでいる。

▶アルバニア放送、ノルウエーの湾に潜入したソ連原潜内で反乱がおきたと放送。

26日 ▶ノルウエーのフィヨルドに潜入したのはソ連F級もしくはW級潜水艦とノルウエー海軍将校非公式に語る。

27日 ▶『プラウダ』紙、グルジア共和国幹部の腐敗を摘発、非難。

29日 ▶ソ連・ハンガリー党首会談終了。

30日 ▶チュメニ油田のボーリング計画超過遂行——《ザプシブプッルネフチ》(西シベリア石油掘さく)生産合同の企業は石油ボーリングで鉞層を昨年度より10万m多い126万m掘った。

12月

1日 ▶サハリンのアリバ＝ノグリキ間鉄道建設開始。

2日 ▶アルダン川、結水下で採金作業続行。

5日 ▶タイシエット線の複線工事はじまる。

7日 ▶アムダリアを渡るガスパイプライン——アフガニスタン＝ソ連邦間ガスパイプラインはアムダリア川の絶壁ケリフ峡谷で川を渡ることになった。90mのタワーにアフガニスタンとソ連邦を結ぶ直径70mmのロープ1本と12本の移動ロープがかけられる。組立中のパイプの直径は800mm、これには送電線と歩道橋がつく。

8日 ▶セミチャストノフ貿易省第一次官、日本のシベリア開発非協力に不満表明。

10日 ▶中ソ国境で衝突か？——モスクワの西側外交筋は先月カザフスタン国境で中ソの武力衝突があり、ソ連兵5人が死んだとの秘密報告を洩した。

12日 ▶チトー大統領、「ソ連への回帰」否定。

▶『プラウダ』、自民党の内外政策失敗と報道。

17日 ▶『プラウダ』、北方領土問題で北京の日本支持を非難。

18日 ▶党中央委総会開かる——18日午前中、党中央委総会が開かれ、新中央委書記にドルギフ・クラスノヤルスク地方第一書記を選出し、ムジャワナゼ党政治局員候補を解任した。ムジャワナゼはコーカサスにおける綱規肅正の責任をとられたものとみられる。この総会では最高会議に提出する73年の経済計画と国家予算案に関するバイバコフ・ゴスプラン議長とガルブゾフ蔵相の2つ

の報告を採択したのちブレジネフ書記長が演説した。

▶タス通信、北爆再開を非難。

▶最高会議（第8次第5会期）開幕——午後6時よりクレムリン大宮殿においてソ連邦最高会議がひらかれ、合同会議に入った。

▶ソ連、昨年殉職した宇宙飛行士の解剖結果を詳細に米国へ提供。

19日 ▶最高会議閉幕——18日開幕した最高会議は73年度国家予算を採択して閉幕した。

▶ソ連邦結成50周年記念特別合同会議クレムリンで開かる。

▶ブレジネフ書記長、「中ソ不可侵条約」締結申入れを北京が拒否したと報告。

21日 ▶ソ連邦結成50周年に酒で乾杯することを禁止。

22日 ▶福田氏の入閣にソ連当局注目。